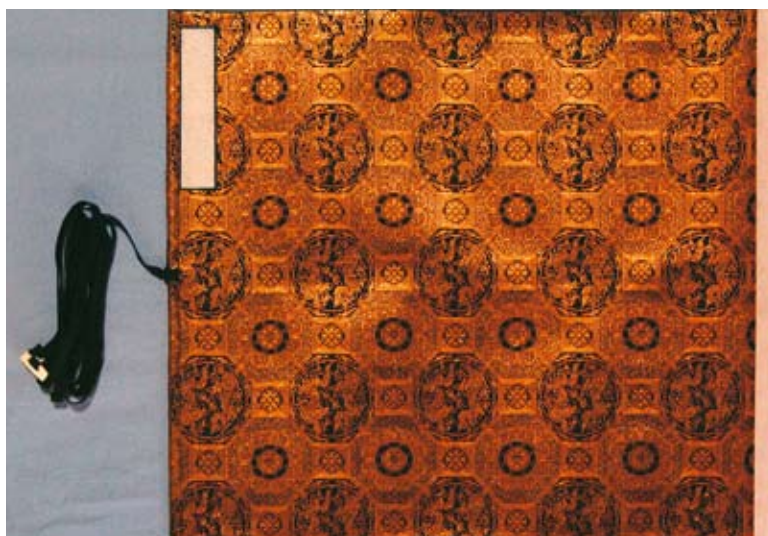


秋穂正八幡宮本八幡大菩薩御縁起（上巻）

——影印、翻刻——

黒田 彰  
筒井 大祐





望と五ふら十六の九圓六百と中國十

十二小書敬邀王慈惠帝主各涉在

中不新理，而欲為之，主臣貪。

慈心不足飽玩者不他解曰

天

津浦支五義七通

神壇一人主祭一人主陪

クの大梵王の御印に云中義異域の

相傳と雖々の三韓考並に其の吾胡と

未修の金二千石の所を

文示中月童愛不為弗也其力云云



教誨神明擁護不忘佛誨真勛善心

神主釋氏佛家三藏之信吳越吳

王右軍年八十八

...

1840

此方乃人使重六金以八生者

明石浦よりふり推古天皇八年六月

二方人天曆天皇元年小二百六十八號武

天竺二年小四十万人也文永弘安の湯に

卷之二十一

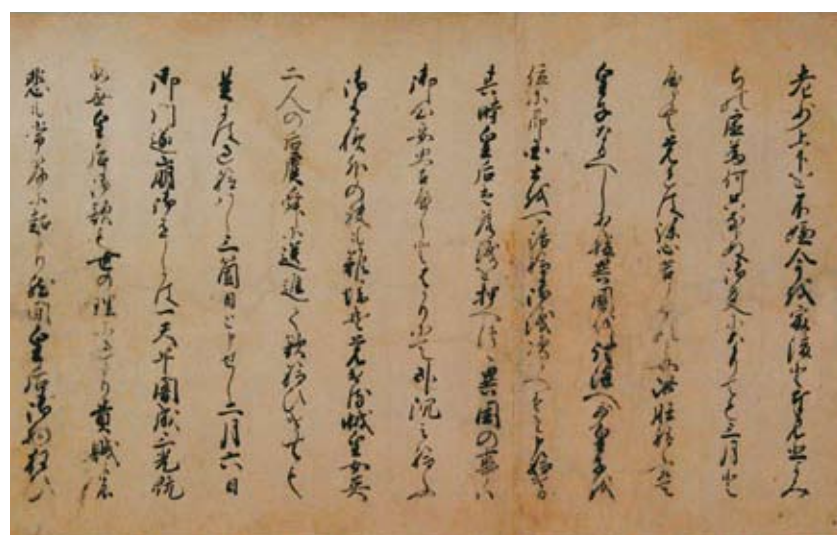
方伯子之



[illegible][illegible]







此書を居るは世の理なり貴賤  
 悲れ事なるなり在る國を居るは  
 乃を如來武臣の文臣の  
 何事なくの先なり  
 鈴川を造るなり天竺大神也之韓  
 已ふ十万八十艘なり紙なり  
 乃軍無き今乃を  
 異國の國なり  
 是を  
 故を  
 乃を  
 水神の如龍神の如  
 乃を

水神の如龍神の如二人と云ふは、  
分、神乃、大、珍、と、  
是、朝廷の、  
と、  
海、  
河、  
二、  
二、  
事、  
進、  
一、  
大、





八幡大菩薩御緣起

交我朝秋津湯藥集章原中津國皆天神

七代神代卷上十二 今曆神御代卷上

神農氏治民萬民不食而足

所到神武天下  
八人代也彼帝  
重來

人主士伐所應神天主也

八幅大菩薩河勢即父仲長天

以亨二年冬新羅國より張歙の軍に

八幅大菩薩河東師父仲夏天

明治二年冬  
 新張國より赤坂の軍艦

きわみなりし因事よりてをりてまゐる

ちくしあまのまへに會はるる懐妊のまへ

若も子へも龍主の年かたの年かた

女子作新衣

卷之六

一、（此處有缺字）

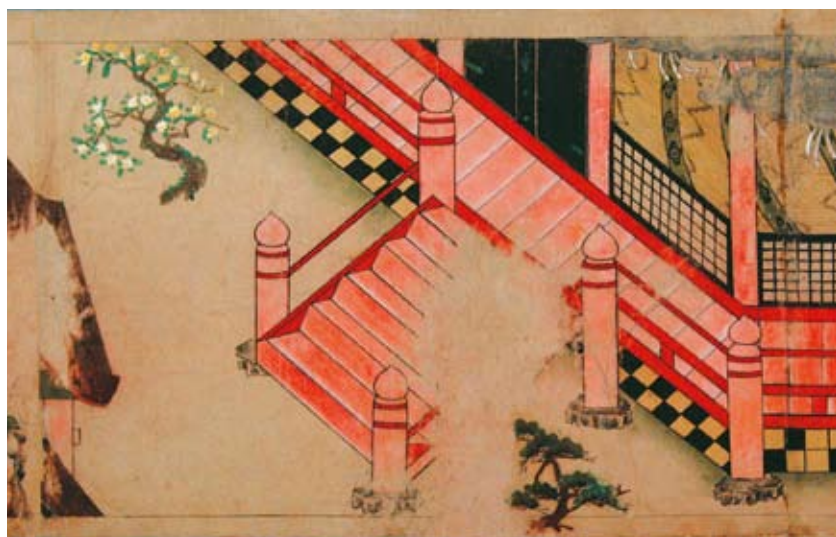
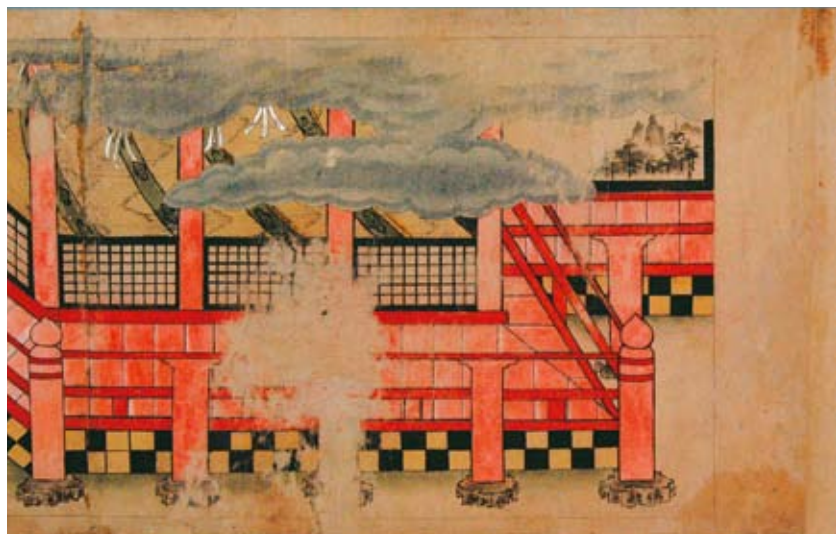
[illegible]

新橋より下流、瀬戸川、天通、我々もどる。

彼異國の敵亡し我土の安穩なり

おりしつひの時らせし門をわきま  
 祈禱せしをわきまの天道我れを  
 彼異國の故郷に亡きをわきま  
 而後一たびわきまの故郷に  
 かく白髪のおれ一人をわきまの  
 回りのわきまの故郷にわきま  
 言て云唐新羅百濟山城をわきま  
 無んぞわきまの故郷にわきま  
 してわきまの故郷にわきま  
 中にも時をわきまの故郷にわきま  
 主人のわきまの故郷にわきま

してわきまの故郷にわきま  
 中にも時をわきまの故郷にわきま  
 主人のわきまの故郷にわきま  
 若くもわきまの故郷にわきま  
 まわりのわきまの故郷にわきま  
 りてわきまの故郷にわきま  
 心もわきまの故郷にわきま  
 いづれをわきまの故郷にわきま















其後門司の實り土大に海より  
 泊るを待ひしに曉も下りて  
 船もふくみしに時ふれぬ故に  
 ども公に人々真中（男）出たり  
 此時皇后深頼み事ふもより甚  
 茶ふもふふのふよりおき作の都  
 にか船中八艘作て別ふれ湯にて  
 船小乗る兵二千三百七十八人なり大  
 將軍、大佐吉、高良の大臣也、扼れ

將軍、大佐吉、高良の大臣也、扼れ  
 ハ高良大明神、其時皇后武國（  
 渡りふれなり）のふれせに船も  
 故泊るより甚なり、射ふも  
 湯流る、仍れもてとる、若の  
 湯平又もりしに、ふれしに、  
 射りしに、物もとり、射ふ、  
 皇后、是、湯流る、心、心、  
 小わたり、













ちるふかして龍宮城にりか  
 竜井の件のごとくかたむきあり  
 けり決の日平且ふゆりて皇后を  
 御前へ持来はせりて皇后后湯感不  
 斜す時皇后暫く對馬のふまを御  
 被りてその言を久石より皇后大  
 王に懐妊し奉りしに皇后は後で  
 ちるかより胎肉のふま目本のま  
 たりはて今二月五日生れりて  
 後の天皇さへんは皇后と我神と  
 出たふりていふ即腹の肉より出と

後の天皇さへんは皇后と我神と  
 出たふりていふ即腹の肉より出と  
 まふゆりていふは我異國より  
 ちるへふにまうてそのりて  
 平朝のちるふりていふは我の神と  
 石氏はていふは腹の肉より出と  
 けりていふは皇后の事也被りて即地生  
 たりて皇后をちるふりていふは  
 ちるはて百歳也渡りていふは  
 乃湯船中よりいふは小軍兵一十  
 二百七十九人也異國の兵船十百八



二百七十九人也異國の兵船十百八  
艘を以て軍士五千人余人を彼處に  
國主大后とて移し之を云目守り  
しむるなり何と云ふ大將軍もや  
則彼處の軍兵とて雲龍の如く  
多くを居る所なりと云ふなり  
と付早速海中に入らば是れ  
海忽と下りて平くして陸地  
なりと云ふなり彼處の者も志  
を以て居る所と付奉へり陸地にて

船を名店と討奉らん。陸平水で  
 おいり。水干。海より。舟が。海  
 環を。し。舟り。浪。運。来。る。  
 舟。五。葉。大。海。と。れ。く。り  
 一。度。黒。國。の。お。ん。て。と。男。忠。く  
 陸。水。ふ。き。く。く。一。人。も。残。く。を。死。失。  
 舟。の。縁。記。は。肥。前。國。作。事。舟。の。人。  
 江。上。の。舟。小。彼。二。士。と。舟。長。と。ふ。り  
 頭。二。寸。より。危。い。舟。と。舟。を。名。店。  
 忠。志。く。い。ま。の。軍。無。き。り。亡。し。舟。の。人。

















文明十七年三月廿日 秋德庄二  
 鴻以暢宮御寶前所奉範之西  
 卷銘記方鍾勝德志所抽無二  
 懸念也領者當社之佛威不空  
 而源宜與現當二世今所領藏統  
 給名者余等遠方邦國家保內  
 民食甚為憂思已仍心中自在  
 永無滿足

大德王源宜並

大德王源宜並

西夏書昌 筆者仇伯宜成

筆者義威

八幡大菩薩恩童訓 降伏事  
 三千世界中央一四天下に坐す切  
 礼に心を化すこととす初に数に無量  
 や光明の門に力に徳に衣に金に寶  
 に貴賤上下之位を合我國淨く徳を  
 南果非臺に地に林蔭棲る味ふ  
 暗農業たりつては東北に收め徳に  
 多穀なりとす無量無量に徳に  
 摩多目なりとす徳に徳に徳に  
 合し一とす徳に徳に徳に徳に  
 銀銅鐵に徳に徳に徳に徳に徳に  
 常風靡 史記  
 天竺二月地王二王坐す徳に徳に止  
 王とす徳に徳に徳に徳に徳に  
 國十とす徳に徳に徳に徳に徳に

参考図 一



参考図 二

## 略解題

菅原道真を祭神とする天満宮では、天神信仰の隆盛に伴い、その祭神である菅原道真の生涯を描く北野天神縁起絵巻が制作され、多数の諸本が伝存する事はよく知られているが、八幡神に化現した応神天皇を祭神とする諸八幡宮に残された八幡縁起絵巻の伝本も、それに匹敵しよう。特に防長地方に多数の八幡縁起絵巻が伝来することについては、臼杵華臣氏が報告され（「防長の八幡縁起絵巻について」、

『神道大系 月報89（安芸・周防・長門国）』、平成元年）、本号で紹介する山口市秋穂<sup>あきほ</sup>に鎮座する正八幡宮に伝来する絵巻も、臼杵氏が報告された内の一本である。なお紙幅の関係から、本号にはその上巻を収め、次号に下巻を収めることとした。

秋穂正八幡宮本は、奥書から文明十七（一四八五）年に源重兼が大願主となり、挿絵の筆者を佐伯重成、詞書の筆者を承盛として制作された事が知られ、挿絵を描いた佐伯重成は、同宮に所蔵される能面の作者、秋穂大夫重成と同一人物だとみられている。臼杵氏は、能面師である佐伯重成が挿絵を描いている点に触れ、「このように手近な人々によって書写がおこなわれたことが防長における縁起絵の普及を容易にしたと言えるであろう」と述べ、防長地方に

おける縁起絵巻の伝播の状況を推定されており、縁起絵巻の制作に、能面師が関わっていることは、在地における絵巻制作の事情の一端を伝えるものとして興味深い。

さて、正八幡宮は、社伝によると、弘仁五（八一四）年に異敵降伏の鎮護のため、宇佐八幡宮から、まず二島古宮の地に勧請された後、文亀元（一五〇一）年に大内義興により、現在地の久米に遷座されたという。なお社伝では、秋穂の海中には雌雄の小島があり、この小島が神功皇后伝承で語られる、異国と戦闘した際に竜宮から借り受けた干珠・満珠の二珠を示すものと伝え、その故に当地を二島と称し、宇佐八幡宮を勧請したという。このような神功皇后伝承の故地に八幡縁起絵巻が現存することは、八幡縁起絵巻の伝播の状況を考える上でも示唆に富む。

秋穂正八幡宮本は紙本着色の絵巻上下二巻（上巻、一九二九・六糎、下巻、一九五四・二糎）で、漢字平仮名交り文で綴られている。平成六（一九九四）年五月三十一日に旧秋穂町有形文化財に登録され、平成七（一九九五）年三月一日に補修修理が完了し、表紙（上巻、縦三〇・〇糎、横三三・六糎、下巻、縦三〇・〇糎、横三三・〇糎）及び、「愚童訓」と題された冒頭一紙七行分は後補されたものである。即ち、本書はその冒頭部を欠く。

さて、秋穂正八幡宮本の特徴は、そのように八幡縁起絵

巻の冒頭に『八幡愚童訓』甲本の一部を付載して、塵輪襲来の場面を描く点にある。同じく冒頭に『八幡愚童訓』を付載する伝本としては、他に山口県美祢市綾木八幡宮所蔵の永祿四（一五六一）年奥書の縁起絵巻があり、秋穂正八幡宮本に欠けている『八幡愚童訓』の冒頭部分は、綾木八幡宮本で補うことが出来る。本書上巻影印末尾に、参考図一、二として、それを掲げておく。秋穂正八幡宮本と綾木八幡宮本は、『八幡愚童訓』部分には細かな異同があるものの、ほぼ同一であるが、八幡縁起絵巻部分は、詞書や挿絵の構成が異なっていることから、両者の直接的な関係は認められない。秋穂正八幡宮本や綾木八幡宮本以外にも、八幡縁起絵巻の冒頭に『八幡愚童訓』を付した絵巻が存在していた可能性もある。

秋穂正八幡宮本は、甲類系統に属する絵巻だが、乙類系統の特徴である塵輪襲来場面を、『八幡愚童訓』に拠って描き、縁起絵巻の甲類系統から乙類系統への展開を考察する上でも、極めて重要な意味を持つ一本である。なお、秋穂正八幡宮本が有している『八幡愚童訓』の本文の考察や縁起絵巻乙類系統との関係については、機会を改めて述べたい。

翻刻に際しては、改行及び、表記は原本通りとし、秋穂正八幡宮本「愚童訓」の判読が不能な部分は、綾木八幡宮

本で補い、補った部分を「」で示した。また、八幡大菩薩御縁起の判読が不能な部分は□で示した。濁点や句読点等は施さず、用字は通行の字体に改めた。本文中の挿絵の入る箇所は、図一以下の形で示した。

#### 付記

本書の影印、翻刻を許可された、山口市秋穂正八幡宮の藤家伸之宮司並びに、参考図の綾木八幡宮本写真掲載を許可された美祢市綾木八幡宮の平賀寿人宮司及び、美祢市教育委員会文化財保護課、長登銅山文化交流館に対し、心から御礼申し上げます。小稿は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(B)並びに、同佛教大学特別研究費による成果の一部である。



## 秋穗正八幡宮本八幡大菩薩御縁起(上卷)翻刻

### 愚童訓

三千世界中央一四天下の南辺劫初皆化生にて寿命長遠也  
世間即無為にして莊嚴自然也光明身に在て無尽夜發行心に  
在て

虚空に遊ぶ尽為人中に宛も如天上愛欲既催して地肥を食  
せんが故に六根勞力して障多く果報漸衰て糠米も尽し故に  
五穀

貧して諍い滋し依之王を立て仰德化万機の仁民と成て備農  
作

六分一最初の皇帝を大三摩多と号す其より以来金銀銅鉄の  
以其宮に入(へし)とそ被定金銀銅鉄之)

輪王次世出東西南北之億兆普風扉史記

天無二日地無二王聖主之鷹運も止天

竺を五にわかし十六の大国五百之中国十

千之小国粟散遙土出来帝王各御座

此中に新羅百濟高麗国之王臣は貪

慾心に不足飽饒盜身に不絶余日本我朝  
を打捕とて責寄(こと数箇度也夫秋)

津島は五畿七道(悉行雲行雨之為)

神壇一人万民皆天神地神之御子孫  
なり大梵天王之縁御を去中華異域の

相接を離たり三韓者此土に雖帰吾朝は

未他国属三千座の神祇百王守護の

並権扉大小乗之仏法衆生与樂の伝

教跡神明権護不怠仏陀真助無止爭

神国を傾誰仏家を滅さむ情異敵襲

来を算れは人王第九開化天皇四十八年に

廿万三千人也仲哀(天皇御守に廿)万三千人

神功皇后の御代に卅万八(千五百人応神)

天皇の御時廿五万人欽明天皇の御宇に

卅四万余人敏達天皇の御代には播磨国

明石浦まで着にけり推古天皇八年に四十

三万人天智天皇元年に二万三千人桓武

天皇六年に四十万人也文永弘安の御宇に

至迄以上十一箇度といへとも皆追帰さる多は

滅亡せり其中に仲哀天皇の御時は異国

より責寄とて先塵輪といふもの形如鬼神

身の色は赤頭は(八に)して黒雲に乗して

虚空を飛て日本(に着人民)を取殺遠去(て)

是を射は弓箭折近寄は心迷て身を滅す

人種既尽なむとす時に帝王此事不便也

自御幸して十善の力にて塵輪を降伏し  
 給はんと思食後の宮に暇を乞御名残を惜て  
 疾して帰参へしそれまでは御待あれとそ誘へ  
 申させ給ける後の申給ひしは心うやけに女人の  
 思ふ程は男子は思食ぬにや片時も離まいらせて  
 有へしとこそ思はねたとひ敵陣に入給とも  
 一の箭には先立可中物をとて出立伴なひ  
 給へは御志の深はうれしく思食せとも習はぬ  
 旅の道すから御いたはしきは無限此后と申は  
 第十五代の帝王後には神明と顕て聖母  
 大菩薩と申は此后の御事也御門は五万人之  
 軍兵前後にたなひき給て長門国豊浦郡  
 に着給ふ安陪の高丸同介丸に惣門を巍固  
 させて塵輪来は急告申へし人臣の力にて  
 討事あるへからすと被思召けり彼二人弓箭  
 を帶て門の両方を守護するに第六日に  
 当て黒雲忽に聳て塵輪か目を瞋かし  
 弓箭を持来ければ高丸武内大臣を以て  
 此由を奏聞するに御門自御弓を取箭掛て  
 吉引射させ給へは塵輪か頸射切て頭と身  
 二に成て墜にけり

塵輪か失ぬるは悦なりといへとも何とか  
 したりけむ流矢進て御門に立たりし  
 かは玉体に有患宝算も限りと成給ふ  
 御心微く思食ければ後の御手を取胸の  
 うゑにおかせ玉ひて生者必滅のならひ  
 老少上下を不嫌今を最後と奉見悲よみ  
 ちの虚為何只ならぬ御事になりても三月と  
 やらむ覺れは弥心苦しけれとも此胎給ふは  
 皇子なるへし相構異国を討随へて皇子を  
 位に即国土を可治給御涙次〔あ〕へすそ申給ける  
 其時皇后は落涙を押へつゝ異国の事は  
 御心安思召へしとはかりにて臥沈み給ふ  
 御有様外の袂も難堪を覚ける蛾皇女英  
 二人の後虞舜に送進て歎給ひけむも  
 是には過給はし三箇日と申せし二月六日  
 御門遂崩御有しかは一天早闇成三光既  
 如無皇后御歎も世の理に過たり貴賤の  
 悲も常篇に超たり然間皇后御物狂ひ  
 の気出来武内の大臣御簾半卷上て  
 何事にて御座にやと申さるれば我は五十

鈴川の辺にすむ天照大神也三韓

已に十萬八千艘の船を出し立て數萬

の軍兵只今來らむとす此地に不着先に急

異國に向給へしとそ仰ける武内は一の駿を

見せ給へとも申さるゝ御詞のおはらぬ先に光を

放て十方を照し宣く一の針を海に入よ三尺

の鮎食付てのほるへし御髪を河に入給はゝ

水神の女竜神の女二人來て御髪を二に分

へし神の枝に大鈴をつけて山の嶺にのほ

りて朝廷の神達を驚申給ふは其瑞忽可頭

とて御心本に復し給ひけり神託に任せ針を

海に入玉へは三尺の鮎二食付てあかる御髪を

河に浸せは水神竜神二人の童女參て御髪を

二にわく此竜神の女は嚴島の大明神水神の

女は宗像の大明神と後には現給ふ四王寺山に

御幸神の枝に大鈴を付御手に捧て立給ふ

事六日までになれとも無驗六日の間遂に供御も

不進立とをし給へは付給へる御妹の二人は

一人は宝滿大菩薩と現し一人は河上

大明神と成給ふ此二人の御妹の申給はく

さのみは何か樂くて御座へき只ならざる

御身なりとも諫留給とも更御身をたはゝ

すして御祈精二心なかりけるされは

四天王來下して石体と成敵國降服

のたのみを増給ひしかは是を四王寺

山と名付し第七日には虚空に光明

充滿て光明即虚空藏菩薩となり虚空

藏菩薩又俗体となり給ふ其形は翁仙人

のことく也此俗の申て宣く我は是地神第五の

彦波瀲の尊也師には大將軍を先とす我子

月神といふは強心武し是を可進隣敵を

責給へとて月神やあると召しかは月神

空より出給ふ御冠に赤衣をめし胡録を負

鎬矢二に御弓を取具持給て前に御座此

彦波瀲の尊住吉大明神の御事也

### 八幡大菩薩御縁起

夫我朝秋津島豐葦原中津国昔天神

七代地神五代已上十二代者皆神御代也彼地

神第五神彦波武鸕鷀草葺不合尊

御子神武天子申は人代始也彼帝より以來

人王十六代御末応神天王と申は今の

八幡大菩薩御事也御父仲哀天王の

御宇二年<sup>癸酉</sup>新羅国より夷敵の軍兵

きおひ来りて日本をうちとらむとす天皇き

ちよくしての玉はく皇后の宮懷妊の王子

若男子たらは竜王の聳になるへし若

女子ならは竜王のきさきと<sup>云</sup>然に仲哀

天王九年<sup>庚辰</sup>二月六日於筑紫橿日宮

程なくほふきよ畢其後神功皇后新羅

百済高麗をうちしたかへんかため鎮西へ

おもむき給ひし時らせゐ門を出させ玉ふとて

祈精せられけるは願は天道我に力をそへて

彼異国の敵を亡して我国を安穩ならし

め給へと申給ひしかはいつくよりとも

なく白髪のお翁一人出来れり皇后

問ての玉はくいかなる老人なるらん老人

答て云唐新羅百済国をうちしたか

へんとおほし召立せ給ふ翁也御供

申て御力になり奉らむとて参りて候也

と申す時皇后御心中に思召様彼

老人のてひさしも我力になるへ

覚へすと思召なから若へんけの物にて

もやある覧とて召供して鎮西へ下

らせ給ふ御誓願御歌に

心たにまことのみちに入人は  
いのらすとても神やまぼらん

## 図二

備前のとまりに着せ給ひし時たかさ  
十丈はかりなる牛出来て彼皇后の乗せ  
給ひたる御船をそむさんとする時此  
老人彼牛の角を取て海のなかへなけ  
入給ふによつて此泊を牛まろはしと  
書て牛まると申也此牛島と成て  
今に海中に侍り夫よりして皇后この  
老人弥々憑敷ものと思召て近く召  
寄て何事も委敷仰合れけり

## 図三

其後門司の関より上大江か崎と申  
泊に着せ給ひしとき塩悉に干あかりて  
船通ふへきに非ず其時に此翁彼船を  
ともを只一人して真中へ皆押出しけり  
此時皇后弥頼敷事に思召けり豊



前国ふなき山の木をきりて宇佐の郡  
にて船四十八艘作て則志かの島にて  
船に乗る兵一千三百七十五人なり大  
將軍には住吉并高良の大臣也梶取  
は鹿島大明神也其時皇后夷国へ  
渡給ふ程にあしやの津に着せ給ふ時  
彼泊にて弓箭をとり出して射付けるを  
御覧すれは行末もはてもなき岩の  
崎十丈はかりさき出たるをひきとりて  
射たりければ物ともなく射とをしてけり  
皇后是を御覧していと、御心まさり  
におほしめしけり

#### 図四

其後かすひのはまと申所に着給ひ  
皇后老人に仰らるゝ様新羅百済国  
へ渡着ても彼夷敵共をはいかゝしてか  
うちしたかふへきとも覺すと仰られける  
とき老人申様是より西に志かの島と  
申所候彼島にあんとむの磯童と申  
者あり此童をめして竜宮城に遣して

早珠満珠と申二の玉を借しめ給へ  
此二の玉たにも候はゝ此国を討したかへま  
しまさむ事いと安き事に候と申其  
時皇后仰られけるは件の童をはいかゝ  
して召へきそと仰られしとき老人  
申さく件の童せいなうと申舞を殊に  
愛し侍也此舞をは又ならまいとも申也  
其後彼舞をは誰人か舞へきやと  
仰有ければ海中に舞台を構へて  
此老人彼舞をまひすましてけり其  
舞台石と成て海中に今にあり  
しかのあまの釣すと灯すいさり火の  
ほのは君をみるよしもかな

#### 図五

其後あんとむの磯童此舞をあいせむ  
とて船に乗て舞台近く出来る皇  
后老人に仰有けるは件玉の事童に  
申へき由仰られければ老人童に申て  
云く汝しらすや日本国王本意をと  
けんかために新羅百済へわたらせ給ふ

日本中に居ながら国王の仰をはいかて  
か背き奉るへき早御力に成て彼国  
の者ともをうちしたかへてまいらせよと  
申給ければ此童いかにも宣旨をは背  
奉るへきと申て竜宮城に行て

竜神に伴のよしを申て此玉をかり  
得奉り次の日早旦に歸りて皇后の  
御前へ持参仕けり其時皇后御感不  
斜于時皇后暫く對馬の国に立寄給  
彼所にしろき方なる石あり皇后大  
菩薩懷妊し奉りしに此石に御腹を  
ひやして若胎内の太子日本の主しと  
なりさらは今一月不可生とこしらへ  
給ひき御きもんには此石を我体と  
思ふへしと<sup>云々</sup>御腹の内にまします  
王子に仰られけるは我異国をうち  
したかへんか為に是まてわたれり汝必  
婦朝のちに生給へとて裳の裾に  
石をつゝみて御腰にはさませ給て  
ありしは此石の事也彼故に御誕生  
なかりき皇后たちまちに男の姿と  
ならせ給て百済国へ渡給ひけり御方

の御船四十八そふ船に乗軍兵一千  
三百七十五人也異国の兵船十万八千  
艘軍兵四十九万六千余人也彼国の  
国王大臣てうろうして云日本はかし  
こき国なり何そ女人を大將軍とするや  
則彼国の軍兵とも雲霞のことく責  
來て皇后の御方うちとり奉らんとす  
其時早珠を海中へ入給ひしかは大  
海忽に干あかりて平くとして陸路  
のことくかわきけり彼国の者とも悉く  
歛て皇后を討奉らんとて塩干に付て  
おいかゝりし時干珠をとりあけて満  
珠をくたし給ひしかは浪蓬萊の  
ことく立來て大海もとのことくみち  
しかは異国のおんてきとも皆悉く  
塩水にたゝよひて一人も残らず死失畢  
ある縁記には肥前国佐賀郡にまします  
河上の宮に彼二玉はおさまる長さ五寸はかり  
頭は二寸はかり也尾はちいさき玉也仍皇后本  
意悉くいてきの軍兵をうち亡し給ふ彼国  
をしたかへて仰られけるは我他国にて既幾計  
の人をころし給ふ定て殺生の名を挙げん事

よしなしと思食て御歎有しかは二の竜王  
海中より出現して件の死人を一人ものこさず  
くいうしなひ畢仍殺生のなけき思食ける

ゆへに放生会を行ひ給ふ而に今の放生会は

異国の死人のきやうやうのため也其時彼

国の大王誓をたてゝ云我等日本国の犬と

なりて彼国守護せむ全く懈怠あるへからず

若敵心あらは天道の責を蒙と云爰皇后

石の上に新羅国の大王は日本国の犬なりと

書付給ふ日本の軍兵帰て後

国の恥なりとて此石の文をけするに

いよゝあさやかになりくすりをぬりて焼とも

かなはずして今に文ありと云々

## 図六

民屋悉為厚恵而已仍心中自在  
求願満足

所写真図

大願主源重兼

筆者佐伯重成

筆者承盛

文明十七年三月廿日 秋穂庄二

島八幡宮御宝前所奉籠之両

巻縁記旨趣勝他志所抽無二

懇念也願者当社之御威不空

而源重兼現当二世令所願成就

給然者余薰施万邦国家保内